

今回、最初の一首は南宋時代の7言絶句「臨安の邸に題す」でした。日本では、漢詩といえば、唐詩ばかりが有名で、宋詩はさほど知られていませんが、今の中国人には宋詩の方が唐詩よりもわかりやすく、親しみやすいようです。

この詩は、中国では小学校の教科書に載るくらい有名な詩だそうです。作者は南宋の林升という生卒年すら分からない人物です。しかもこの一首しか残っていないという、正真正銘の一発屋詩人です。

果たしてこのまま、この繁栄に酔いしれていいのか、と憂国の情を暗示した最後の一句が非常に有名なのだそうですが、それにはこの詩が書かれた歴史背景を知らなくてはなりませんね。今回も植田先生の歴史講義から始まりました。

宋王朝の後半(南宋)は、異民族の金に北半分の領土を取られ、臨時の都を杭州の地に置いたまま、モンゴルに滅ぼされるまで150年も持ちこたえました。しかも経済的には繁栄を極めていました。臨安とは、臨時の都という意味です。この間、武力に訴えてでも北方領土を取り返すべき、という主戦派と、経済的な繁栄に甘んじ、屈辱を忍んででも戦わずに和議を結ぼうとした主和派とに分かれて抗争が続きました。詩人の多くは主戦派だったようです。なお、ここでいう「邸」とは旅館のことです。「題」とは、書き付けるという意味です。恐らく旅館の壁か何かに書き付けたために残ったものかと思われます。作者自身が付けた題名かどうかはわかりません。「西湖」という題

qí lín ān dī lín shēng
題臨安邸 林升

shān wài qīng shān lóu wài lóu
山外青山楼外楼

xī hú gē wǔ jǐ shí xiū
西湖歌舞几时休

nuǎn fēng xūn dé yóu rén zuì
暖風熏得游人醉

zhí bǎ háng zhōu zuò biàn zhōu
直把杭州作汴州

lín ān dī lín shēng
臨安の邸に題す 林升

sān gāi qīng shān lóu wài lóu
山外の青山楼外の楼

xī hú gē wǔ jǐ shí xiū
西湖の歌舞幾れの時にか休まん

nuǎn fēng xūn dé yóu rén zuì
暖風薫り得て遊人酔い

zhí bǎ háng zhōu zuò biàn zhōu
直だ杭州を把りて汴州と作す

名のテキストもあります。

さて、この時代の主戦派の代表が岳飛でその反対が秦檜です。この二人の抗争も日本ではあまり知られていませんが、中国では芝居や物語を通じて、知らない人がいないほど有名な歴史事案です。救国の英雄と言われた岳飛を謀殺した秦檜は、売国奴として名を残しています。『宋史』では「姦臣伝」にその名が見えます。

明代には岳王廟の前に罪人姿の秦檜夫妻の銅像が作られ、中国人観光客は、この像に憎悪を込めて罵倒したり、唾を吐きかけたりしていました。(最近では「像に唾を吐いたり、叩いたりしてはならない」という掲示がされるようになったらしいですが。)「過去は水に流す」「死んだらみな仏」という日本人感覚を持つ私などからいうと、たとえ歴史上の悪人であっても、そこまで感情移入できないなあ、と感覚の違いを感じざるを得ないのですが、きっと日本でいう『忠臣蔵』のように、国民的感情を掻き立てる歴史事案なのでしょう。

詩の意味は、「西湖の歌舞はいつ終わるとも知れず続いている。人はみな薫る春風に酔いしれて」と美しい杭州の都の繁栄ぶりと、人々がその豊かさに酔いしれている様子を伝えています。そして最後に「人々は臨時の都杭州を、占領された本

来の都、汴州(今の河南省開封市)だと決め込んで憚らない」と風刺しています。異民族に取られた北方領土のことを忘れて、今のように遊び惚けていいのか?というこの最後の一句が、中国人の愛国心にピタッと来たからこそ、この詩は千年読み継がれてきたようです。ちなみに一句目の楼外楼という三文字は中華料理屋さんの名前にもなっているようです。

音読してみると、平仄もしっかりしていて、非常に朗読しやすい詩であることが分かります。いつものように、先生のお手本をじっくり聞いた後、一人一行ずつ順番に音読練習をし、その後一人ずつ一首を通して朗読します。七言絶句は四文字目の後ろでポーズを入れ、4・3のリズムで読むので、参加メンバーは、原文の音を十分に感じることが出来ます。今日は植田先生から「後ろの三文字の後ろにポーズを入れると、四拍子になる」と言われ、本来、音のない後半三文字の後ろに頭のなかで「ウン」を入れて、四拍子で読んでみました。すると不思議と新鮮な感覚をおぼえました。

二首目は中唐初期の詩人李益(748～829年)の「夜受降城に上りて笛を聞く」という詩でした。日本ではあまり知られていませんが、中国では、やはり知らない人のいない、著名な作品の一つだそうです。

李益は大暦十才子(大暦とは代宗治下の年号で776～779年まで)と呼ばれた英才の一人で、

高名な詩人でもあります。若い頃はなかなか出世の機会に恵まれず、節度使の幕僚として、西の辺境に赴いた経験があります。

漢詩の中には辺塞詩という、主に辺境の地にかり出された兵士達の気持ちを詠ったジャンルがありますが、多くは現地経験のない詩人が想像だけで作ったものです。その中に在って、李益は従軍経験者であり、それだけにこの詩は実感がこもっています。

前半二句はどこまでも続く砂漠の風景と霜のように白く冷たく光る月の情景という、視覚に訴える描写です。三句目は、そこに何処からともなく笛の音が聴こえてくるという、聴覚の世界。そして最後の一句では、笛のものの悲しげな音とともに、望郷の念に駆られる兵士たちの心のうちへと迫っていく、という見事な構成になっています。たった28文字で、茫漠たる大砂漠を包み込むこの感覚。ロマンを感じますね!

さぞかし作者の李益も男らしい素敵な人に違いないと思いきや、植田先生が「この人はね、傲慢な性格でね」と言われたのでとても意外でした。「また嫉妬深いことでも有名でね、正妻と妾が何人かいたのだけど出掛けるときは、それぞれの部屋に鍵をかけた上、部屋の前に灰を撒いて、侵入者がいれば分かるようにしていたというんですよ」と。

そして、しまいには、「霍小玉伝」という伝奇小説の主人公になったそうです。その話の内容は次の

ようなものです。

李益が科挙を目指していたころ、没落貴族の娘で遊女に身を落とした小玉と相思相愛の仲になりました。彼女と将来を誓っていたにもかかわらず、科挙に及第して帰郷した彼は、母親の勧めで母方の従姉妹を正妻に迎えます。それ

yè shàng shòu xiáng chéng wén dí
夜上受降城闻笛

李益

huí lè fēng qián shā sì xué
回乐峰前沙似雪

shòu xiáng chéng wài yuè rú shuāng
受降城外月如霜

bù zhī hé chù chuī lú guǎn
不知何处吹芦管

yí yè zhēng rén jìn wàng xiāng
一夜征人尽望乡

じゅこうじょう のぼ
夜上受降城に上りて笛を聞く

李益

かいらくほうぜんすな
回楽峰前沙雪に似て

じゅこうじょうがいつき
受降城外月霜の如し

いず ところ ろ かん
知らず何れの処か蘆管を吹く

せいじんことごと きょう
一夜征人尽く郷を望む

来の都、汴州(今の河南省開封市)だと決め込んで憚らない」と風刺しています。異民族に取られた北方領土のことを忘れて、今のように遊び惚けていいのか?というこの最後の一句が、中国人の愛国心にピタッと来たからこそ、この詩は千年読み継がれてきたようです。ちなみに一句目の楼外楼という三文字は中華料理屋さんの名前にもなっているようです。

音読してみると、平仄もしっかりしていて、非常に朗読しやすい詩であることが分かります。いつものように、先生のお手本をじっくり聞いた後、一人一行ずつ順番に音読練習をし、その後一人ずつ一首を通して朗読します。七言絶句は四文字目の後ろでポーズを入れ、4・3のリズムで読むので、参加メンバーは、原文の音を十分に感じることが出来ます。今日は植田先生から「後ろの三文字の後ろにポーズを入れると、四拍子になる」と言われ、本来、音のない後半三文字の後ろに頭のなかで「ウン」を入れて、四拍子で読んでみました。すると不思議と新鮮な感覚をおぼえました。

二首目は中唐初期の詩人李益(748～829年)の「夜受降城に上りて笛を聞く」という詩でした。日本ではあまり知られていませんが、中国では、やはり知らない人のいない、著名な作品の一つだそうです。

李益は大暦十才子(大暦とは代宗治下の年号で776～779年まで)と呼ばれた英才の一人で、

高名な詩人でもあります。若い頃はなかなか出世の機会に恵まれず、節度使の幕僚として、西の辺境に赴いた経験があります。

漢詩の中には辺塞詩という、主に辺境の地にかり出された兵士達の気持ちを詠ったジャンルがありますが、多くは現地経験のない詩人が想像だけで作ったものです。その中に在って、李益は従軍経験者であり、それだけにこの詩は実感がこもっています。

前半二句はどこまでも続く砂漠の風景と霜のように白く冷たく光る月の情景という、視覚に訴える描写です。三句目は、そこに何処からともなく笛の音が聴こえてくるという、聴覚の世界。そして最後の一句では、笛のものの悲しげな音とともに、望郷の念に駆られる兵士たちの心のうちへと迫っていく、という見事な構成になっています。たった28文字で、茫漠たる大砂漠を包み込むこの感覚。ロマンを感じますね!

さぞかし作者の李益も男らしい素敵な人に違いないと思いきや、植田先生が「この人はね、傲慢な性格でね」と言われたのでとても意外でした。「また嫉妬深いことでも有名でね、正妻と妾が何人かいたのだけど出掛けるときは、それぞれの部屋に鍵をかけた上、部屋の前に灰を撒いて、侵入者がいれば分かるようにしていたというんですよ」と。

そして、しまいには、「霍小玉伝」という伝奇小説の主人公になったそうです。その話の内容は次の

ようなものです。

李益が科挙を目指していたころ、没落貴族の娘で遊女に身を落とした小玉と相思相愛の仲になりました。彼女と将来を誓っていたにもかかわらず、科挙に及第して帰郷した彼は、母親の勧めで母方の従姉妹を正妻に迎えます。それ

yè shàng shòu xiáng chéng wén dí
夜上受降城闻笛

李益

huí lè fēng qián shā sì xué
回乐峰前沙似雪

shòu xiáng chéng wài yuè rú shuāng
受降城外月如霜

bù zhī hé chù chuī lú guǎn
不知何处吹芦管

yí yè zhēng rén jìn wàng xiāng
一夜征人尽望乡

じゅこうじょう のぼ
夜上受降城に上りて笛を聞く

李益

かいらくほうぜんすな
回楽峰前沙雪に似て

じゅこうじょうがいつき
受降城外月霜の如し

いず ところ ろ かん
知らず何れの処か蘆管を吹く

せいじんことごと きょう
一夜征人尽く郷を望む

を知った小玉は傷心のあまり病気になり亡くなってしまいました。

それ以来、彼が新しい妻を迎えると、必ず隣に若い男の幻が現われ、その度に李益は嫉妬に狂って妻を離縁することになり、そんなことが何度も続きました。それは、亡き小玉の祟りだということです。この物語はかなり有名になり、後世まで読み継がれ、芝居にもなって人気を博しました。

「ま、そんな事は実際にはなかったと思いますけどね、彼の態度があまりにデカくて傲慢だったから、こんな風に書かれちゃったんでしょうね。人間、やっぱり謙虚でないといけませんね」と植田先生。この小説の作者蔣防は時の政界において、李益の反対派に属していたので、李益を貶める為に書いたという説もあります。

「美しく見事な詩の出来ばえと、作者の人間性のミスマッチが面白いね」と植田先生。作品からイメージする作者像に、ここまで想像を裏切られたのは、私も初めてでした。しかし、「ミスマッチをも愉しむ」。これは今回植田先生に学んだ新しい詩の鑑賞法と言えるでしょう。

さて、今回のみならず、これまで漢詩の作者たちを詩人として扱ってきましたが、中国にはかつて詩人という職業はありませんでした。李白も

杜甫も一度は官職に就いています。特に中唐以後は、お役人になるための試験である科挙に詩文が重視されるようになったため、当時の受験生にとって、作詩も必須科目となりました。お役人に限らず、知識人は必ず詩を作らなければなりません。平仄や韻を整えたり、対句を考えたりしているうちに、バランスの取れた人間性が養われる、と考えられていたのでしょうか。

しかし、千年詠み継がれる名作は決してエリート官吏たちの受験の産物ではなく、杜甫や李白を代表とする、体制からはじき出された、いわばアウトローたちのものが殆どです。高級官吏を目指した白居易や柳宗元も、苦い左遷経験の中から多くの名作を生み出しています。名作とは、「飼いならされた」思考のなかでは生まれられないものと改めて感じます。枠の外にはみ出て、非難され、排斥され、たとえひん曲がってしようと、常識を超えた角度からモノを見て初めて、隠された、見えない大切なものに光を当てることが出来る、と感じました。

筆者アラフォー女子もこの歳になると、遠慮もだいぶ薄れ、怖いものも減り、ふてぶてしくなってきました。だからこそ常に「世俗に飼いならされない」視点を持ちたいと思う今日この頃です。